

義務教育学校における成長の形

～小中交流の分析を通して～

石井久雄

1. はじめに

(1) 本研究の目的

2015年の学校教育法改正により、義務教育学校が新設された。それを受けて、2016年度に22校の義務教育学校が誕生した。2018年度には82校に増加している。従来の小中一貫校よりも、義務教育学校の方が、義務教育9年間を一体的に運営できる特徴があるといわれている⁽¹⁾。

誕生して間もない義務教育学校ではあるが、研究は少しずつ蓄積されている⁽²⁾。これまで、横浜市立霧が丘学園（神奈川県）の事例⁽³⁾、新庄市立荻野学園（山形県）及び大槌町立大槌学園（岩手県）の事例⁽⁴⁾、品川区立日野学園（東京都）及び神戸市立港島学園（兵庫県）及び守口市立さつき学園（大阪府）の事例⁽⁵⁾、府中市立府中学園（広島県）の事例⁽⁶⁾等が紹介され、研究が進められている。

義務教育学校において、小中交流は重要な柱である。小中交流の教育効果を考えてみると、小学生は、中学生から学ぶことが多くあることは容易に想像できる。中学生を間近に見ることで、小学生は自分の将来の姿を形作っていくからである。それでは、中学生は、小中交流でどのような教育効果を得ることになるのだろうか。この点に関しては、あまり研究が蓄積されていない⁽⁷⁾。

そこで本稿では、小中交流を通して、中学生はどのような成長を遂げるのかを明らかにする。具体的には、第1に小中交流によって中学生がどのように変化するのかを明らかにする。第2に小中交流の問題点を指摘する。第3に小中交流が充実する方向性を示すことにする。

(2) X 学園の概要

本稿では、X 学園の小中交流活動を取り上げることにする。それは、X 学園は、10年以上も小中交流を行ってきたからである。また、小中交流に関する多様な活動に取り組んできたからである。

なお、X 学園は、2006年に開学した大都市圏に位置する小中一貫教育校である。2016年に、義務教育学校となった。全校児童生徒は、約1000人である(2019年度)。施設一体型の校舎で、小学1年生から中学3年生までが、一つ屋根の下で学校生活を送っている。ただし、中学1年生からX 学園に入学する生徒が一部いる。X 学園では、中学1年生、2年生、3年生を、7年生、8年生、9年生と呼んでいる。本稿でも、同様に表記する。

(3) 調査の概要

X 学園の小中交流における中学生の実態を明らかにするために、質問紙調査を行った。調査の概要は、以下の通りである。

- 対象 X 学園の9年生
- 人数 114名
- 方法 質問紙法(学校での集団記入式法)
- 期間 2019年3月上旬

本稿では、上記の質問紙調査の中で、以下の2つの質問項目を分析した(自

由記述)。「設問 A あなたが7-9年生だった時, 1-6年生と交流したことで, 楽しかった(成長できた)と思うエピソードを書いて下さい」。「設問 B X学園での小学生と中学生との交流について思ったことを何でも書いて下さい」。第2節では, 設問 A を分析した。第3-5節では, 設問 B を分析した。

2. 小中交流における中学生の変化

X学園では, 小中交流は, 様々な場面で行われている。ここでは, 主な交流の場として, B&S活動, 部活動, 運動会, FSS活動の4つの場面を取り上げる。それらの場面で, 中学生は, どのような変化を遂げるのかをみてみることにする。

(1) B&S活動

B&S活動とは, 9年生(中学3年生)が小学1年生のお世話をする活動である。具体的には, 9年生が, 1年生の朝の準備を手伝ったり, 給食の配膳を行ったり, 給食と一緒に食べたりすることである。そこでの変化として, 4点挙げられる。

1つ目は, 「小さい子との関わり方の習得」である。以下の回答をみてみよう。なお文末の「小, 女子」は, X学園に小学1年生から入学した女子生徒の回答であることを示している。また, 「中, 男子」は, X学園に7年生(中学1年生)から入学した男子生徒の回答であることを示している。

「B&S活動では, 1年生が何をどのくらいできるのかが, 分からなかったので, 1年生がどんなことに興味があるのか, どのくらい一人でやることができるのかを考えながら(相手の気持ちを考えながら), 行動する力が身についたと思います」(小, 女子)。

義務教育学校における成長の形

「9年の時のB&S活動で、1年生と交流した時に、学年の違いによる差を知って、どうやって相手に気持ちを伝えるか、その行動を直す、またはしてもらうかということを考えて行動したので、相手に話して指摘するという力がついたと思った。例えば、1年生がなかなか荷物の整理ができずに、あたふたしている時に、相手にどうやって言えば行動するかなどを、考えられるようになったと思います」(中, 男子)。

B&S活動を通して、1年生と一緒に活動することで、「小さい子との関わり方」を学んでいることが分かる。

2つ目は、「親心の芽生え」である。以下の回答をみてみよう。

「B&S活動：登校後にすること（ルーティン）を教えるのが、最初は大変だったが、少しずつ自分でできるようになっていく過程を見ていて、とても喜ばしかった」(中, 男子)。

「B&S活動（9年→1年）：朝学活、朝のしたくて、1年生のあの手は、ものすごく小さい。その小さい手で、荷物を出し、ランドセルを片付けていて、『成長』というもののすばらしさを見た」(小, 女子)。

1年生の成長が、9年生にとっての喜びとなっている様子が伺える。子どもをみる親の心境と重なるものであろう。

3つ目は、「優しい気持ち」である。以下の回答をみてみよう。

「B&Sで1年生と交流できたのが楽しかった。交流給食で、1年生に仲の良い子ができたり、一緒に遊んだりした子が、かわいくて癒された」(中, 女子)。

「小さい子と関わることで、優しい気持ちになれたりもしました」(中, 女

子)。

1年生のかわいい仕草に、癒され、優しい気持ちになる様子が伺える。様々なことがある中学生の学校生活の中で、B&S活動は、気持ちがほぐれるひとときであろう。

4つ目は、1年生との「つながり」である。以下の回答をみてみよう。

「1年生をお世話したことで、とても仲良くなれ、今でも声をかけられるようになった」(中, 男子)。

「B&Sで1年生に友だちができ、今でも会うと手を振ってくれるのが、とても嬉しいです」(小, 女子)。

B&S活動が終わっても、1年生との「つながり」が続いている様子が伺える。

以上のように、B&S活動において、「小さい子との関わり方の習得」, 「親心の芽生え」, 「優しい気持ち」, 「つながり」といった変化が、中学生にみられることが明らかになった。

(2) 部活動

X学園では、5年生から中学生の部活に参加できる。従って、5年生から9年生までが、部活動で一緒に活動することになる。そこでの変化として、5点挙げられる。

1つ目は、「リーダーシップを身につける」ことである。以下の回答をみてみよう。

「部活でも、あまり言うことを聞いてくれない5, 6年生をまとめることは

義務教育学校における成長の形

大変だったが、それを上手くまとめて指導し、後輩達が上達するのを見ると嬉しかった」(中, 男子)。

「部活動→後輩ができて、「甘え」が少なくなり、リーダーシップなどの力を身につけざるを得ないため、自然とつくようになっていった」(小, 男子)。

X 学園では、部活動において、7年生(中学1年生)でも、後輩がいることになる。9年生になるにつれて、たくさん後輩たちをまとめていく必要に迫られる。その結果、中学生たちは、必然的にリーダーシップを身につけていくことになる。

2つ目は、「年齢に近い年下の子との関わり方の習得」である。以下の回答をみてみよう。

「部活でも、後輩に教えるのは大変だったけど、分かりやすく教えるには、どうしたら良いか考え、工夫したことで、うまく教えられるようになった」(小, 女子)。

「部活動で、5, 6年生にやり方を教える時、年齢が近い年下への対応を学んだ」(中, 男子)。

部活動で、小学生5, 6年生を指導する中で、「年齢に近い年下の子との関わり方を習得」している様子が伺える。

3つ目は、「見つめ直す」ことである。以下の回答をみてみよう。

「部活動中に、後輩の6年生の子が、楽器の吹き方を聞きに来て、教えた後、お礼を言われたのが、嬉しかったし、自分もそれをきっかけに、自分の担当する楽器をもっと知ることができた」(中, 女子)。

「部活動で、たくさんアドバイスを求められたことで、自分自身を見つめ直

すことができた」(小, 男子)。

中学生には上下関係があり, 先輩になかなか聞きづらい部分がある。しかし, 小学生は, 上下関係をあまり意識しない所があり, 先輩に積極的にあれこれ聞いてくることが多い。そうした小学生からの問いを通して, 中学生は自分自身を見つめ直しているといえる。

4つ目は, 「切磋琢磨」である。以下の回答をみてみよう。

「部活動では, 5年生と6年生とも関わったが, 非常に良い影響を受けていたと思う。やはり, 5年生にしろ6年生にしろ, 中学生にもひけをとらない人がいたので, その人(後輩)に負けないようにと練習に身をそそぐことができた」(中, 男子)。

「部活動では, 下級生が頑張っているのを見て, 自分が刺激され, いい経験となった」(小, 男子)。

小学生とはいえ, 中学生にとっては, 小学5年生, 6年生は, 年齢が近いので, 実力が伯仲する可能性がある。そうしたなかで, 中学生が, 小学生と切磋琢磨している様子が伺える。

5つ目は, 「居場所」である。以下の回答をみてみよう。

「部活で5, 6年生と関わり, 年は違うけど, 同じ趣味などで仲良くすることが出来た。部活で, 1日何時間も練習などをして, 気持ちを5, 6年生と共有できた」(中, 男子)。

「部活動(8年→7年&5年):7年生とは, 1年しか関わらないが, 5年生とは3年も関わっていて, 体力は追いつかないはずなのに, 頑張っていてくる。その強い心を見て, 「人間」というものの心の強さは, どこからきてい

るのか気になった。そして、5年生に対しては、7年生よりも可愛がっていた」(小, 女子)。

8年生(中学2年生)の場合、9年生(中学3年生)の夏に部活動を引退するとしたら、7年生(中学1年生)から入部した後輩とは、実質的には1年数ヶ月しかつきあうことが出来ない。しかし、小学6年生の場合、9年生(中学3年生)の夏に部活動を引退するとしたら、小学5年生から入部した後輩とは、3年数ヶ月もつきあうことになる。部活動は、部員同士が長い時間を過ごすことによって、5年生から9年生まで幅広い学年の子どもたちの居場所となっているといえる。

以上のように、部活動において、「リーダーシップを身につける」、「年齢の近い年下の子との関わり方の習得」、「見つめ直す」、「切磋琢磨」、「居場所」といった変化が、中学生にみられることが明らかになった。

(3) 運動会

X学園の運動会は、5-9年生が縦割りでチームを作り、そのチームをもとに競い合う。また、運動会の練習では、兄弟学年で出し物を見せ合うという活動を行っている(以下の2つの学年が兄弟学年:7年生と4年生,8年生と3年生,9年生と1年生)。そうした中で、小中交流が行われている。そこでの変化として、3点挙げられる。

1つ目は、「年齢の近い年下の子との関わり方の習得」である。以下の回答をみてみよう。

「5年生と6年生とは、体育祭の応援などの際にも関わった。やはり中学生とは価値観が違っている部分が多く、まとめたり、盛り上げたりするのが、とても大変だった。しかし、中学生(特に9年生)が主となり声をかけ、練

義務教育学校における成長の形

習を積み重ねていくうちに、自然と小学生もしっかりと一員になり、1つのチームとしてまとまっていった。自分自身、リーダーシップといった部分が成長し、声を積極的にかけることの大切さも感じる事ができた」(中, 男子)。

「運動会の時に、応援団長を務めて、そこで5, 6年生はいつまでたっても話をしっかり聞いてくれませんでした。そこで、どうしたら5, 6年生が聞いてくれるか、どうやって聞かせるかを仲間と協力して話し合うことができ、成長できた」(中, 男子)。

運動会では5-9年生の縦割りチームで競う応援合戦がある。9年生が応援団長となり、チームを引っ張っていくことになる。その時に、小学5年生, 6年生をまとめることに苦労があるが、そのことを通して成長していくことが分かる。

2つ目は、「お手本となる」ことである。以下の回答をみてみよう。

「体育祭や文化祭の出し物のリハを見てもらっている時は、『カッコいい』や『あーいう先輩になりたい』と思われるように全力で取り組んだ」(中, 男子)。

「文化祭, 運動会などの練習では、9年生として、後輩のお手本になるように頑張りました。交流することで、成長できます」(中, 男子)。

兄弟学年での交流で、体育祭の出し物を小学生に見せる。その際に、上級生として、お手本となるように頑張ることが、成長につながっているといえる。

3つ目は、「初心を取り戻す」ことである。以下の回答をみてみよう。

「1年生の運動会や学習成果発表会を見たとき、私は一人一人が大きい声を出していて、とても聞きやすいと思いました。1年生は、こんなに大きい声

を出しているなら、自分も頑張ろうと思える良いきっかけになりました」(中, 女子)。

「運動会。7年生では4年生, 8年生では3年生, 9年生では1年生と, お互いの出し物を見せ合い, 交流することがあり, どの学年の時も, 一生懸命やっていることが多く, 見ていて楽しかったし, 自分達も頑張りたいという気持ちや, より一層応援したい, 成功してほしいという思いが増した」(小, 女子)。

小学生が頑張っている姿をみることで, 中学生が初心を取り戻し, 頑張る気持ちは高まることが分かる。

以上のように, 運動会において, 「年齢の近い年下の子との関わり方の習得」, 「お手本となる」, 「初心を取り戻す」といった変化が, 中学生にみられることが明らかになった。

(4) FSS 活動

X 学園では, 5-7年生が縦割りで班を作り, その班を中心に様々な活動を行っている (FSS 活動)。例えば, ブックトーク, 長縄大会, 百人一首大会, 駅伝・持久走大会等である。そのなかで, 小中の交流が行われる。そこでの変化として, 2点挙げられる。

1つ目は, 「リーダーシップを身につける」ことである。以下の回答をみてみよう。

「FSS で小学校から上がったばかりの頃に, 班の最上学年になって5, 6年生を引っ張っていくことで, リーダーシップを養うことができた」(中, 男子)。

義務教育学校における成長の形

「FSS 交流：5, 6, 7年の中で、7年が一番上だから、5, 6年をまとめることで成長できた」（中, 女子）。

FSS 活動では、7年生が班長となる。7年生が、5, 6年生をまとめるなかで、リーダーシップを身につけている様子が伺える。

2つ目は、「居場所」である。以下の回答をみてみよう。

「FSS 活動で、5, 6年生に友だちができたのも、嬉しかったです」（中, 女子）。

「FSS 活動で、今でも話したりすることがある。それから、その周りの人とも仲良くなって、嬉しかった」（中, 女子）。

7年生は、同じ班の5, 6年生と友だちとなり関係を深めていく。さらに、その友だちの友だち（周りの人）とも親しくなる。FSS 活動を通して、7年生は、5, 6年生たちとの居場所を確保しているといえよう。

以上のように、FSS 活動において、「リーダーシップを身につける」、「居場所」といった変化が、中学生にみられることが明らかになった。

3. 小中交流における問題点

小中交流において、中学生たちは難しさを感じている部分もある。特に、6年生に関するものが、比較的多く挙げられていた。そこで、2点指摘しておく。

(1) 上下関係意識の欠如

上級生を敬う態度が身につけていないことが、問題点として挙げられている。次の回答をみてみよう。

「5, 6年で敬語が使えておらず、イラッとしました」(小, 女子)。

「小学生が, 中学生に慣れてきて, タメ口をきくのが, 正直嫌だった」(中, 女子)。

以上のように, 敬語が使えないことに対して, 中学生は不満を持っているようである。

(2) リーダーシップの欠如

普通の小学校(1-6年生だけがいる学校)では, 6年生は最高学年となり, 下級生を引っ張っていく立場にあり, リーダーシップを身につけていく。しかし, 1-9年生がいる義務教育学校のX学園では, 6年生のリーダーシップが十分に身につけていないことが問題点として挙げられている。次の回答をみてみよう。

「他の学校は7-9年生がいないので, 小6の態度が良いが, ここは7-9がいるので, 小6の小学生トップとしての自覚がない」(中, 男子)。

「小学生と中学生が交流できるという点は, すごく良いと思うのですが, 逆にその交流をしてしまうことで, 普通の小学校では6年生がリーダーとなって主体的に行動する力を身につけられる事や, 小学校での卒業式での感動が, この学校ではあまり感じられない」(中, 男子)。

以上のように, 6年生に「小学生トップ」としての自覚がないことに, 中学生は不満を持っているようである。

(3) 裏と表の関係にある課題と成長

まず, 「上下関係意識が欠如」している小学5, 6年生について。一般的に,

義務教育学校における成長の形

小学生は上下関係をあまり意識せず、年上の人に敬語を使うという習慣があまりない。なので、義務教育学校で、中学生と接触する小学生も、上級生に対する態度が十分には育っていないといえる。ある意味で、小学生文化と中学生文化の葛藤場面であるといえよう。しかし、そのことを受け入れることが、成長につながることもである。例えば、次のような回答があった。

「色々と小学生になめられた事は、沢山あったが、楽しかった。小学生は、やっぱり楽しい」(小, 男子)。

小学6年生が敬語を使わなかったことに対して、ムカつくのではなく、受け入れ、乗り越えることができたとき、そこに成長がある。換言すれば、多様な振る舞い方、多様な人間を受容、許容できる態度が育成されると思われる。

次に、6年生の「リーダーシップの欠如」について。X学園の6年生は、普通の小学校の6年生よりは、リーダーシップが育っていない部分があるのかもしれない。しかし、X学園では、リーダーシップを本格的に身につけるのは、7-9年生である。例えば、次のような回答があった。

「X学園の7-9年生の特徴は、常にリーダーであり続ける事だと思います。他の中学校ならば、7, 8年生はリーダーとしての役割は少ないですが、X学園の7-9年生は、全員が小学生のリーダーとして行動します。そうした3年間の経験は、大きく成長することにつながると思います。おそらく9年生のリーダー意識は、他の中学よりも高いのではないのでしょうか。3年間を通してそう感じました」(中, 男子)。

6年生はリーダーシップを十分には身につけていないかもしれないが、その

分7-9年生はリーダーシップを飛躍的に発揮していくことになる。

4. 小中交流のこれから

よりよい小中交流を行うためには、どうすればよいのであろうか。4つの改善点が挙げられた。

第1に、「回数」を増やすことである。例えば、以下のような回答があった。「もっと回数を増やすと良いと思った。朝や給食、FSSの交流だけではなく、普段学校生活の中で密接に関わることができる機会を作って欲しい」(中, 女子)。「もっと小学生と中学生が交流する機会を増やしたら、もっと楽しくなると思う」(小, 男子)。

第2に、「一緒に行う活動」を増やすことである。例えば、以下のような回答があった。「交流遠足など、長い時間一緒にいられるような行事があれば、より仲が深まると思うし、楽しいのでいいと思います」(中, 女子)。「いい活動だと思います。でも、もっと活動が欲しいです。一緒に物作りなどあれば、もっといいと思います」(中, 男子)。

第3に、(9年生1人と1年生1人のような)「マンツーマンの関わり」を多くすることである。例えば、以下のような回答があった。「交流しても9年生は9年生、8年生は8年生などで固まってしまうことが多い。マンツーマンで交流などを実施してみたら良いと思う」(中, 男子)。「交流で、9年と1年といったまとまりで交流することが多かったのも、もっと人と人といった、1対1での交流の種類を増やしていくべきだと思った」(中, 男子)。

第4に、「他学年との交流」をより多くすることである。例えば、以下のような回答があった。「兄弟学年とぐらいしか交流することができないので、全学年と交流していくような感じがいいと思います」(小, 女子)。「兄弟学年交流は、年下の子とふれ合う機会が多くて、楽しかった。ただ、1年間の間では決まっ

た1学年の小学生としか交流しないのが、残念だと感じた。ローテーションで組み合わせをかえたり、運動会や学習成果では全学年の発表を見てみたいなど思った」(小, 女子)。

5. おわりに

X 学園における小中交流を通して、中学生はどのような成長を遂げるのであろうか。主に3つあると考えられる。

第1は、「上級生としての意識の向上」である。「リーダーシップを身につける」こと、「お手本」になること、「初心を取り戻し」頑張ろうとすることから、中学生(7-9年生)は、上級生としての意識を非常に高めているといえる。

第2は、「関係構築能力の向上」である。中学生は、「小さい子との関わり方」、「年の近い年下の子との関わり方」を習得している。換言すれば、中学生は、多様な他者と関係を取り結ぶ能力を磨いているといえる。

第3は、「関係維持能力の向上」である。小さい子とは、「親心を芽生え」させたり、「優しい気持ち」になったりすることで、「つながり」を強くしている。また、年齢の近い年下の子とは、「切磋琢磨」したり、自分自身を「見詰め直したり」しながら、「居場所」を確保している。中学生は、構築した関係を安心空間として維持しているといえる。

このように、小中交流を通して、中学生も大きく成長している。少子化社会のなかで、子どもたちが、多様な他者と関わる能力を身につけるのは難しくなっている。そうした中で、この「成長」は、貴重なものであるといえよう。なお、X 学園における小中交流の9年間を振り返る回答があったので、2つ紹介しておく。

「正直、困ること、大変なこと、どうしたらいいのか分からないこと…。沢

義務教育学校における成長の形

山ありました。けれど、一つ一つの行事や交流を一緒に行っていくうちに、どんな時に、どう対応すればいいのかわかるようになってきて、すごく楽しくなりました。なので、本当はやるのが嫌なん、面倒臭いと思う人、たくさんいると思います。けど、小さな子と関わるうちに、自分よりも小さい子に学ばされること、優しくなれること、笑顔になれること、どれか一つ必ずあると思います。だからこそ、私は小学生と中学生の交流は、とても大事なので、これからも X 学園の伝統として、受け継いでいって欲しいと思います」(小, 女子)。

「私は、1年生の時から X 学園で生活してきました。だから、小学生の時、中学生の優しさが分かったり、中学生になって小学生を助けたいと思う気持ちがありました。普通は、1年生と9年生が交流することはないと思いますが、一貫校だから、1年生は9年生と交流して多くの事を学び、9年生は1年生に初心を思い出され、お互いが学び教える環境ができていたと思います。また、FSS 交流や EN 交流⁽⁸⁾で、近い学年と交流することで、最も近い考えの中で、お互いの考えを交換することができて、考えがひろがりました。X 学園などの公立一貫校は、小学生と中学生が同じ校舎で生活することが特徴なので、そこを重視することが大切だと思いました」(小, 女子)。

X 学園の中学生が、「上級生としての意識」、「関係構築能力」、「関係維持能力」を向上させるのは、小中交流があるからである。小中交流のない義務教育学校では、中学生は大きな成長を遂げることはできないであろう。小中交流が、より充実していくことを願っている。

謝辞

質問紙調査実施に協力していただいた X 学園の校長先生をはじめ、先生方には記して感謝申し上げます。

義務教育学校における成長の形

《注》

- (1) 押田貴久「義務教育学校制度の創設と導入状況」『教育制度学研究』第25号、2018年、242-249頁。
- (2) 田中真秀他「小中一貫教育の設置形態・運営及び教育課程に関する一考察～創設期における義務教育学校の教育課程等に注目して～」『川崎医療福祉学会誌』第27巻2号、2018年、359-367頁。
- (3) 酒井徹「義務教育学校における生徒指導についての展望と課題～横浜市立霧が丘学園の事例をもとに～」『東洋英和女学院大学 人文・社会科学論集』第35号、2017年、99-115頁。
- (4) 田仲誠祐他「義務教育学校設立初年度における取組に関する一考察～経営資源の有効活用と教育課程の編成に関する現状と課題～」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第39号、2017年、137-147頁。
- (5) 西川信廣「教育課程編成の学校裁量権拡大の意義と課題～義務教育学校、小中一貫型小・中学校の制度化の意味～」『京都産業大学 教職研究紀要』第12号、2017年、1-21頁。
- (6) 池田哲哉「義務教育学校として『新たな一歩』を創造：上」『週刊教育資料』教育公論社1453号（11月6日号）、2017年、18-20頁。
- (7) 小中交流に関する研究として、以下のものがある。石井久雄「小中一貫校における中学生から小学生への『お世話活動』の意義に関する一考察～小中交流がもたらす影響に注目して～」『日本特別活動学会紀要』第19号、2011年、23-31頁。石井久雄「義務教育学校における小中交流に関する一考察～5, 6, 7年生の交流活動を中心に～」『明治学院大学教職課程論叢 人間の発達と教育』第16号、2019年、73-90頁。樋口直宏、石井久雄、遠藤宏美「義務教育学校の諸相～質問紙調査を中心に～」『小中一貫教育における発達特性および汎用的能力をふまえたキャリア教育プログラム開発』、科学研究費研究成果報告書（研究代表：樋口直宏）、2019年、27-44頁。
- (8) X学園では、8年生と9年生との交流活動をEN活動（交流）と呼んでいる。